

LOMI

Eld: Kou MUKAI

2-12-2, ASAHIMACHI, ABENO, OSAKA, JAPAN 10

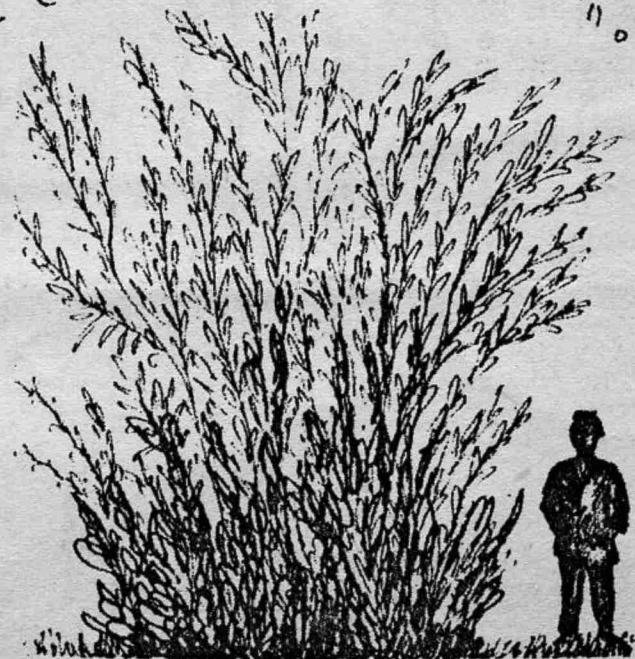
Jul, '80 No. 239

同行四人 向井 孝

★ 忙しくて、イオムをつくるごまで手がまわらない。そこで今号はらよつと趣向をかえて、のりとほさみの、切り貼り。

★ 「詩」？は、詩誌「スモスの」28号29号30号31号のせたもの。といつても、その発行の都度、しめ切りに包まれて、いつもギリギリか、教目おくれで、ゆつとこぼれて出まると、★「詩」とか何とかいう形式のことは、あまり考えず、ともかく「つくった」というふうなつくり方だから、とくに「詩」として読んでもらうのでなく、まあ「綴り」として見て下さい。

★ つくると、すぐふらふらした、ムリヤリに感想をきく。 ぜびあなたに感想も、きかせて下さい。(キキ)



1 金沢の町はずれの始発駅「野町」はひなびた。バス待合室みたいで、一輛だけの電車がガラんとしたホームにぼくとふう子さんを待っていた。朝、九時三分発。「白山下」ユキ。改札がはじまって一分もたたぬままだ少年顔の車掌が、のりこんできた。とたんに、電車がゴトゴトと揺れてもう動き出す。



「そんなこと言わんと、ま、連れてっておくなはれ」

終点「白山下」は、氷雨。三方が山、一方が谷川の瀬音。自動車道が一本、すぐ曲ってみえなくなって、あたりに人家もない「無人駅」橋のたもとにバスが停つて、一里野温泉ユキ。十分後に発車。どうしようか

5 雨にとり囲まれて、三人だけ。バスにのると、あわてたように「メガネ」も、のってくる。バス賃四百円。高い雨宿りや。十一時、発車、

2 チンチン鳴ってる踏み切りをすぎるとすぐ電車は冬ざれの田んぼや林の中。盛り土しただけの野っ原の駅。停るたびにお客が二人三人降りて車内が、みるみる透けていく。「あれっ、おいちゃん。あの、ずっと前の坐席にすわってる、あの銀ブチメガネの、あれ……」

「うん、そう思ってたんや。薄い髪の毛とメガネの、あれはおなじみサンやで」

「ホンマや。ちがいないわ。イヤヤなあ」

バスがうごきたとたん向うから、ゴルフ帽の若い男が、全力疾走で現われてきた。ナント、ナント、よくよくみれば、これがまたまた、おなじみサンやんか！息をきらしながら顔をそむけて、うしろへ坐ろうとする。「おいもうバレてるのや。仲よう連れてつてもらおう」

「アカン云うたかて、降りる気ないくせに」

「おいちゃんにも、よろしう頼んでえな、ふうちゃん」

「心やすう、名前呼んでいらんわい」

3 昨夜は、Iさんの家に泊った。ふと地図をみていて、「そうや。明日一日は、ふう子さんと加賀白山の冬景色みにいこ。日がえりて、行けるとこまで……」

エ工名前や。北陸鉄道「鶴来温泉・白山比咩(ひめ)神社・手取深谷・仏師ヶ野・中宮……」

朝八時に起きて、シャケのにぎりめしを二つつくってもらって「そやけど、ぜんぜん気がつかなんだなあ」

「大阪駅では、階段を駆け昇つて、とびのつた瞬間ドアがしまつたのに」

「ほんまに、どうやってつけてきたんやろ電車は、いま「加賀一の宮」をうごきだすところ。いつの間にか、行手の山はかき消えて、鉛色の空一面。いまにも、降ってきそうや。」



4 「あんた、大阪からずっと、つけてきたん」

「知ってはったんか。さむうて、さむうて」

「ほんまに、あきれてしまうわ」

「何処まで、行きはりますねん」

「行きさきなんて、あるかいな」

6 雪まじりの雨の中景色がぐるぐる変っていく。「ゴルフ帽」が、あちこちつかまりながら前へ歩いてくる。

「おセンベ、どうですか」

「イラン。きらいや」

「そんなこと云わんと、ま、帰るまで一しよに……」

「せつかくの、ラブラブデーが台なしや」とつぜん、車体がぐおーつと傾むく。スリッパした車輪が、軋んで悲鳴をあげる。運転台の視野が、崖つぶちから空へと旋回してとまる。座席から、とび出さなかつたのは、運転手だけ。

「アブナカッタナア」

「ピックリスルワ、モウ」

同行四人。

「加賀白山山中、二百メートルの断崖へてん落」なんてことになつたら新聞や週刊誌は、どうかくやるか……

ふと気付くと、「メガネ」の声

「ふうちゃん！ こっち側の窓、滝が見えまつせえ」窓ガラスのくもりを拭きながらの大サーピス。

〈赤い鳥〉奇談

向井 孝



山鹿泰治は一八九二年、京都の生まれ。一五歳の時上京し、出版社に住みこむかたわら、エスペラントを学ぶ。そしてエスペラントを契機に大杉栄と知り合い、アナキズム運動に飛びこむ。大杉栄との『平民新聞』の発行、サンジカリズムの文書の地下出版と、彼の活動ははなばなしが、その本領は、得意のエスペラントを駆使して、日本のアナキズム運動を国際的な場へ導いたことであつた。

国大陸でアナキストたちと交流する機会を得たが、その後、何度か中国を訪れ、国際的連帯関係の維持に努めている。『アナキズムとエスペラント』 山鹿泰治、人とその生涯 向井孝 JCA出版 一千円

また国内でも、エスペラントのアナキズム雑誌の発行、辞書の編纂、『老子』のエスペラント訳と、エスペラントを常に労働者の団結と国際連帯の武器として活用していた。後は生涯を一労働者として過ごしたが、エスペラント学習から体得した世界市民意識を失うことはなかった。アナキズムとエスペラントを一身に合一させたある先達の生き方を、自伝に基づいて生き生きと再現した、興味深い本である。

五〇〇字紹介

ちよつと三日ばかり、留守してま夜中すぎに帰ってきた。

「うわあ、おいちゃん、これ、なに」 さきに立ったふう子さんが、(「サルートン」の入口で、声をあげる。

門灯をつけると、タタキに赤いペンキがとびちって、足もとまで—

「あつ、ここもや、おいちゃん」 玄関よこの壁に、ばあつとぶつつけたペンキのかたまりが、

羽をひろげた赤い鳥のかたちになって 羽先きのしずくが、まだ動く。

「わるいこと、しよるなあ」 みまわすと、あたりはみんな、灯をけしたくらがりで、誰かが、しいんと息をつまらせて、こちらを見ている気配。

2

S君が訪ねてきた。

「すぐ、ここ判った？」

「ええ、壁に赤い鳥はりついているのが目印しや、と教えてもらたんで—」

それから急に改まって

「そやけど、用心せなあきませんで—」

「〇〇のU氏と、X×のN氏のところにも、ついているのを、見ましてん—」

「暴動とか地震とか、なにかコトがおこつたら、まず第一番にヤルとこの目じるしや、云うてまっせ」

「ホンマかいな。ぼく(アカ)やのうて(クロ)やのには云つたものの、冗談ではすまへん。さつそくふう子さんと、タワシでゴシゴシ、が、セメントのデコボコ化粧壁、とても落ちるもんやない。しや—ないから、そのまま。」

3

ちよつと一ぱい(カマ)でのもんで、旭町通りを、ぶらぶらのぼつてきた。坂道に、新聞をひろげて坐り、ペンキ缶を三つならべている。

—どこかでクスネてきた(売りもん)やないと、どこからか



「おいちゃん」 エツ、とふりかえると 低くおさえた声。

「どや、買うとき—すぐいるやろ？」 帽子でかくれていた顔を、ひよいと上げて、ニヤリと片眼をつぶつてみせた。

「な、あの手でいくんや。(アリババと四〇人の盗賊)の—。手伝うたるよ」

それから大声で、パンと手をたたいて、

「よつしや。この地図もサーピスして、たった千円!」 ぱつとひろげた地図の先端が、ころころ転がって、ぼくの足許から、エスカレーターのように、ずんずん、伸びていく。

あわてて、それにとびのると、 —あつ、もう、ここは新世界の市場通り—

4

走馬灯みたいに、うしろへ走つていく町並。

「ほら、な、ここが関経連のH。徴兵制がいる言うた奴や。大拘の悪看守長Kのここはこれ。関電労組のダラ幹Sと、Sの親分M議員とこも、ちゃんと印しつけたある。」

もちろん、町内会の小ボス連中まで、軒なみ片っぱしからや—

ペンキ缶に、ハケをつつこむたびに、赤い鳥が飛び立って、

両側の門柱や壁に、ぱつ、とはりつく。 「これだけ印しつけといたら、あいつら眼エしろくろさせよるで」

「ほれ、地図—めんに、赤い鳥がいつぱい—」 「もうエエやろ。—」

5

ふつと、肩のうしろをふりかえると、 一つのまにか、もう、ぼくひとり、 阿倍野橋を行きかう人波にもまれながら 空のペンキ缶を、右手にぶらさげて佇つていて、 とたんに、どこか近くで しきりにふう子さんの呼び声が、きこえてくる。 「おいちゃん—どうしてるの、

むかえにきたんよ、おいちゃん—」 —ああ、夕日の通天閣が、きれいや—



夕闇の中

向井 孝



1

公判傍聴を終つて、出てくると、まだ廊下に私服がうろろうろしている。通りすぎながら数えたら、16人もいた。裁判所構内を出ると、すぐ堂島川。誰も渡らない石の階段橋を、二段とびにとび上っていく。

あたりをみまわしてから、一しゅん、私はバレリーナになる。

夕空の中で両腕をゆっくりはばたかせ、中之島図書館側へと降りていく。

もう引潮のように、退勤時の人があふえだしている市役所まえ。

雲間がきれて、夕日がきいろく、一めんに射してくる。

中の島川のひろい河面の向う、うすむらさきにかすんだ朝日ビル。

あかね空に透けて、遠く小さく人影がうごく、わたなべ橋。

「はよかえろ。いま何してるやろ。おいちやん……」

2

このまえの傍聴は、おいちやんと一しよだつた。

橋のたもと、地下鉄淀屋橋の階段をおりてきて、切符売場へ曲ろうとしたとたん、おいちやんが、ぱつと立止った。

それから廻れ右して、ゆっくり、東・西・南・北へミエを切った。

「これ、尾行除けのマジナイ……」

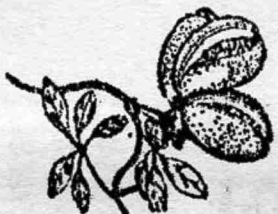
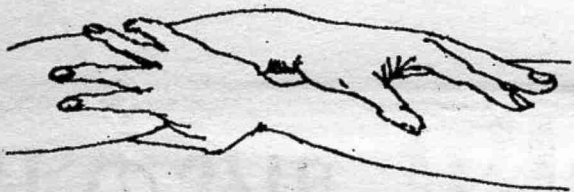
それをおもい出して、私は、一歩ふみ出しかけてから、ヤツとばかりに、うしろをふりむく。ところが……

人ごみの向うで、はつと、男が静止していた！

階段をおりきつたところで、30才ぐらい、色黒、はげたおでこを前髪でべつとりかくした、皮ジャンパー。

と、フィルムが動き出して、太い円柱のかげに、スーとはいっていった。

そのまま、男はいつまでも出てこない……「イヤヤなあ。すると、私のうしろ姿を、何から何まで、見てたんやなあ。」



3

おいちやんが云つた。

「このままやと、すぐ一九八四年や。けどまだ、あと五年ある……」

「逃げたらアカン。何ですか云うて、こっちから尾行したらエエネン」

それで、円柱へと近づいていく。胸がドキドキ。

そおつとのぞくと、いた！男が。キョロキョロ遠くをさがしている。

それから——そばで見上げてる私に気付いて、ギヤァー。

円柱からとび出して、もがくように人波をかきわけていく。

びつたりうしろにくっついて、彼が小走りすれば、私も走る。とまればとまる。

とたんに、脱兎のように走りだした。

証券ビルの昇り口を見つけて、飛び込む。階段を駆けあがる。くつ音が反響する。

歩道から、サクを越えて車道へ。

「あつ、あぶない」

車とぶつかりそうになってよろめく。

やつと渡り切った向う側を、みるみる遠く、片足をひきずるように、はねながら。

もう見えない。

「でも、轢かれんで、まあよかつた」

きょう、一九七九年。二月二一日

夕闇の中。

「まだ、どこかで、誰かが見てるやろか。」

おいちやん……」

